

2005年6月19日 聖霊降臨節第6主日礼拝

『主を求めろ』

(アモス9章11~12節、使徒言行録15章12~21節)

神は、イスラエルにも異邦人にも分け隔てのない方です。神は、イスラエルの民に聖霊を与えたように、異邦人にも聖霊を与えられました。異邦人のコルネリウスとその家族や、そこにいた友人たちの上に聖霊が降るのを、ペトロや他の兄弟たちも目撃したのです。ユダヤ人も異邦人も皆、イエス・キリストの恵みによって救われることがペトロによって証言されました。この話を聞いていた全会衆は静まりました。そうして、パウロとバルナバの話聞くようになりました。二人は、自分たちを通して神が異邦人の間で行なわれた奇跡、救いの業を語ったのです。

さて、二人の話が終わると、主の兄弟ヤコブは立ち上がりました。主の兄弟とは、マリアとヨセフの息子たちのことです。主の兄弟たちは、イエス様が地上に生きておられた時には、誰もイエス様を信じていなかったといえます。それどころか福音書には、母マリアと兄弟たちがイエスを取り押さえて来ていた、とも書かれています。しかし、主が復活された後、ヤコブはイエスを信じるようになっていたのです。ヤコブがどのようにしてイエスを救い主と信じるようになったのか。そのいきさつは、聖書に書かれてはいません。ただ使徒言行録の頃には、ヤコブは教会の柱と呼ばれるほどになっていました。このヤコブが、この場で大切な発言をしたのです。神は、異邦人の中から御自分の名を信じる民を選び出そうとなされた。そのことは、はじめにシメオン・ペトロが話した通りですと。ペトロが話したこと、パウロ、バルナバの話したことも、旧約聖書の預言者たちが語って来たことも、共に神の救いの意志に一致していますと。そういうことで、ヤコブは預言者アモスの言葉を引き合いに出しました。16節「その後、わたしは戻ってきて、倒れたダビデの幕屋を建て直す。破壊された所を建て直して、元どおりにする。」教会は、ユダヤ教を昔のまま再建したものではありませんし、異邦人になじみやすいようにと作りかえられたものでもありません。新しく神の民を立てられる。そうして選ばれ、集められたのが教会です。預言者アモスの言葉を借りれば、神が再建なさるダビデの幕屋であるというのです。神様は確かに倒れたイスラエルの民を、このように再建すると約束して言われました。それは、昔のようなダビデ王朝が栄えた時代をもう一度再現しようということではありません。ユダヤの人たちは、それが預言者を通して語られた神の御意志であると考えて来ました。しかし、人々の考えたイスラエルの繁栄は、のぞましいものだったのでしょうか。それを、もう一度考え直してみるべきです。イスラエルは、ダビデからソロモンの時代にかけて国土を拡げ、兵力も充実し経済的にも発展します。それから四百数十年の間、ダビデ王朝が続きます。けれども、人々の心は神から遠く離れて行きました。表面的にはエルサレムは繁栄しますが、神殿の中にはバビロンの偶像がありました。人々の献げものの中に、ごまかしもありました。そのことを預言者アモスは指摘しています。そのために、ダビデ

の王家は異邦人の手に渡されたのです。これは神様からの懲らしめでした。神は、ダビデの幕屋を建て直すと預言者を通して言われてきました。しかし、それは昔を取り戻すということではありません。新しいイスラエルを神が集められるのです。その中には、かつてのユダヤ人だけでなく、異邦人たちも含まれていました。神の計画は、人の思いを越えたスケールの大きなものなのです。17～18節「それは人々のうちの残ったものや、わたしの名で呼ばれる異邦人が皆、主を求めようになるためである」。ここには、ユダヤ人だけでなく異邦人も含まれています。これまでユダヤの人々は、自分たちと血のつながりのある一族だけが神に選ばれた民である、と考えてきました。異邦人たちは、自分たちユダヤ人と同じようになることで救われる。そう思いこんできました。しかし神が選ばれたのは、血縁によるユダヤ人やイスラエルの部族ではありません。真の神を心から信じる人々を、世界中から選び出されました。それまで真の神を知らなかった異邦人の中からも、神は御自分の民として人々を選ばれていたのです。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、神は御自分のために選ばれたものたちが、主を求めて生きようとご計画しておられたのです。

そもそもイスラエルの始まりの時がそうでした。神がエジプトの国からイスラエルの民を導き出されたあの時も、イスラエルの方から神を求めたわけではありません。神は、追いつめられ苦しむイスラエルの声を聞き、自ら降ってこられたのです。こうして神は、イスラエルの民を御自分の名によって奴隷の家から導き出されました。神は、恵みによってイスラエルを選び分けられたのです。神がそうして諸々の民の中から恵みによって選出された人々が、イスラエル神の民と呼ばれて来たのです。そうでなければ、イスラエルの民は、他の民族と何の違ひもありません。真の神とは全く縁のないまま、この世の罪にまみれたまま終わっていたのです。神の民と呼ばれて来たのは、イスラエルの側にふさわしいものがあつたからではありません。「主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かつたからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であつた。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに...主は力ある御手をもってあなたたちを導きだし...救い出されたのである」(申命記7章7～8より)。

ですからイスラエルは、決して自分たちを誇ることはできませんし、異邦人たちを排除することもできないのです。神は、先に選ばれたユダヤの人々を通して、更にたくさんの異邦人にも救いの手をのべてこられたのです。これは、アブラハム時からすでに約束されていたことでした。「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創世記12章3節)と。

主の兄弟ヤコブの言葉もこのことを確認するものでした。「それで、わたしはこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません」。そして、アンティオキアの教会に手紙を書き送ることになりました。その内容は、偶像に供えて汚れた肉と、淫らな行ない、絞め殺した動物の肉と血とを避けるように。即ち汚れたものを避けることでありました。偶像に供えた肉とは、異教の神々に供えてあつたものだけでなく、偶像に供えられた後、

市場に売られていた肉をも意味します。淫らな行いとは、近親同士の性的関係、律法で禁じられた近親結婚も含みます。絞め殺した動物の肉は、祭儀的手続きとして動物は血を抜いてから食べるようにと言われていました。ノアの時から血を含んだままで肉を食べてはならないということでした。血には動物の命があるから、それを食べるなということだったのです。今でも、ユダヤの人たちは、血を含んだ肉を食べるなというこの決まりを守っています。これらのことはレビ記 17～18 章からきています。

汚れた食べ物、神の前で汚れた人間関係を避けること。これらは旧約の時代からあった戒めです。この戒めは、生まれながらのイスラエル人にも、イスラエルの中に寄留する外国人にも、同じように要求されてきました。そういう意味で、律法そのものはユダヤ人にも異邦人にも差別はなかったのです。神は、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、御自分の名にふさわしく聖なる者となるように、と言われてきたのです。神はわたしたちを聖なる者とするために、イエス・キリストを与えられたのです。わたしたちは皆、イエス・キリストの尊い血によって罪から清められたものたちです。

キリストを通して神に清められたクリスチャンとして、汚れを離れて聖なるものとなるように。それが主の兄弟ヤコブが確認したことでした。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、大切なのは主の民として相応しく生きることです。そのために律法は与えられたのです。主イエスも、御自分は律法を完成するためにこられたといわれています。主イエスは、神の律法を二つの戒めにまとめられました。それは、神を愛し、隣人を愛するということです。

神を愛し隣人を愛することと、エルサレムで話し合われたことはどう関係があるのでしょうか。この事件は、ある一部のユダヤ人たちが、異邦人のクリスチャンにも自分たちと同じように割礼を受けさせよと主張したことに始まっています。つまり、自分たちと同じにならなければ、あなたたちを受け入れないと迫ったのです。それは、隣人への愛と配慮に欠けていました。自分たちが背負い切れない重荷を、隣人に負わせるという罪に落ちたのです。

わたしたちも、この人たちと同じような過ちを犯します。特に新しい人が新しい生活に早くなじめるように。そう配慮しているつもりが、いつの間にか隣人に自分たちの習慣や考えを押しつけている。それは本当に隣人への配慮になってるわけではありません。自分たちの習慣を覚えさせることは、隣人への愛ではありません。反対に、隣人のやり方にただあわせればよいというわけでもありません。それは、決して愛ではありません。本当に大切なのは、隣人の救いのために祈り考えることです。自分の魂と同様に、隣人の魂への配慮をもするということです。ですからこう言われたのです。「神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません」と。神に立ち帰ること、そして神の民に相応しく生きること。それは、イエス・キリストからわたしたちに与えられた贈り物です。主の恵みによってわたしたちは生きる。そのことが確認されました。イエス・キリストの名によって救われているとは、そういうことなのです。こうして異邦人は、割礼なしに、ただ洗礼によってクリスチャン

として受け入れられることになったのです。

[説教者：堀地敦子牧師]